

児童の遊びをひろげる環境づくり

高 鋤 裕

1. はじめに

小学部の児童にとって「遊び」は楽しみであり、自発的で自由なものである。また、遊ぶことで主体的な活動が多く見られ、学校生活の中でも大切にしたいものとなっている。

本校の児童にとって室内で遊ぶ大きな空間としてプレイルームがある。児童が自由に遊んで楽しめる場所となるよう遊具等が設置されているが、児童にとって遊べる内容や環境設定が不十分に思われた。そこで、より児童の遊びが広がるよう、児童の遊びの環境を整える取り組みを行うことにした。

2. 1学期の児童の遊びの様子

児童が校内の小学部のエリアで遊ぶ場所として、教室やプレイルーム、小学部ホール（以下小ホールと記す）がある。中でもプレイルームは遊具やおもちゃがあり、室内遊びのメインの場となっている。年度当初のプレイルームの図は以下の通りであった。

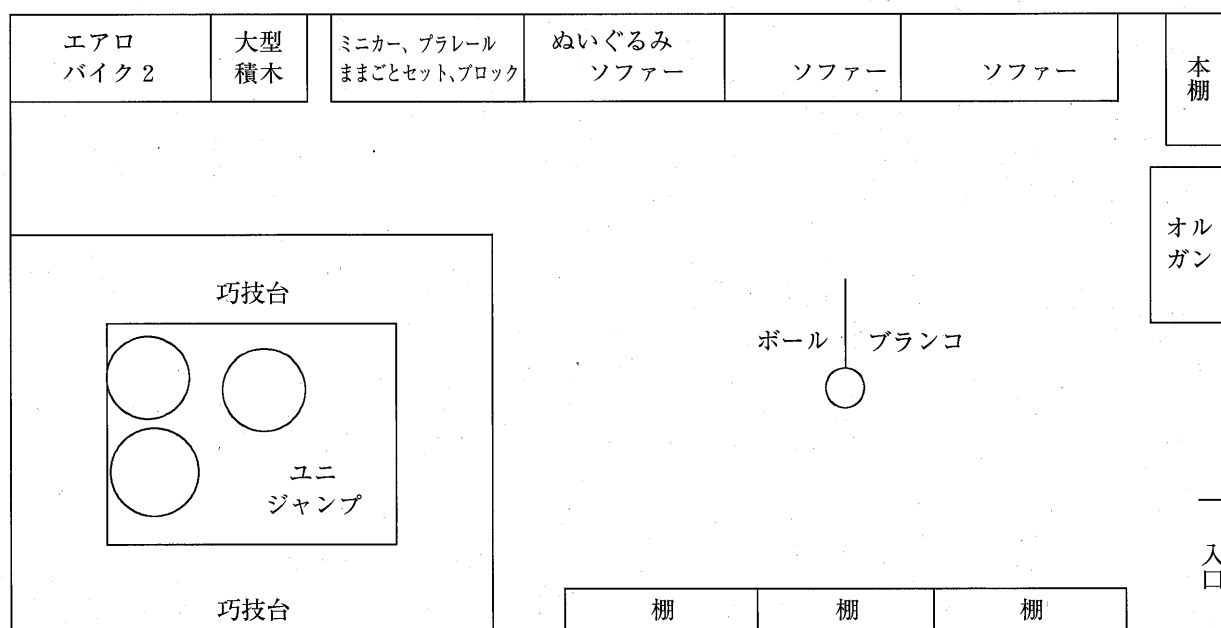


図1 プレイルームの様子

児童の日常の遊びの様子を観察する中で、プレイルームの中で十分遊びきれていないように感じられた。例えば、動的な遊具（巧技台、ジャンピングボード、ボールブランコなど）と静的な遊具（ままごとセット、ぬいぐるみ、ブロック、絵本など）が混在しているため、ブロックなど静的な遊具で遊ぼうとしても動的な遊具で活発に遊ぶ児童に蹴散らされる場面が見られたり、わざとミニカーをまき散らして、歩いてくる児童にふませようとする児童がいたり、また活発な児童の声や動き、音が苦手でプレイルームに入れないでい

る児童の姿も見られた。いろいろな物が雑然と置かれているようにも思え、活発な児童も遊びきれていないと感じられた。

また、プレイルームは、7～8名程度の児童が遊ぶには適当だが、小学部13名の児童が一緒に遊ぶには狭い空間である。外で遊べない雨の日や冬季はプレイルーム以外でも遊べる場所の確保が必要に思われた。小ホールはスペースがあるが、ソファとビデオセットがあるくらいで使用する児童は少ない状況であった。

これらのことは、児童13名の一学期の休み時間の教室以外の室内遊びの場所や内容についてアンケートを行った結果にも裏付けられた。(表1 表内の記号は、◎は毎日利用、○は週3回ほど利用、△は週1回ほど利用、無は全く利用していない事を表している)

表1

	プレイルーム				小ホール				その他			
	◎	○	△	無	◎	○	△	無	◎	○	△	無
1組	0名	0名	2名	2名	0名	1名	1名	2名	2名	0名	0名	2名
2組	2名	1名	0名	1名	0名	0名	2名	2名	2名	2名	0名	0名
3組	1名	2名	2名	0名	2名	1名	0名	2名	1名	1名	0名	3名
全体	3名	3名	4名	3名	2名	2名	3名	6名	5名	3名	0名	5名

利用状況を見ると、プレイルームを毎日あるいは週3回ほどとよく利用しているのは6名の児童と半数にも満たず、小ホールも4名と少なかった。特に1組の児童は、プレイルームや小ホールを利用する人数の少なさが目を引いた。その分、教室を中心として過ごしたりその他の場所(exメディアルーム、職員室など)に遊びを求めて行く児童が多いようであった。また、遊びの内容に対してもアンケートをとったが、巧技台、ユニジャンプ、ボールブランコは利用されているものの、プレイルームにあるおもちゃの利用は少なかった。これは持ち寄りのおもちゃがほとんどで、古くて色がはげ落ちている等、児童にとって興味あるおもちゃが少ないからではないかと思われた。児童が遊びたくなる玩具を購入したり製作して、その充実を図る必要も感じた。

子どもの遊びの環境について調査するために、夏季休業中に保育園や児童相談センター、養護学校などの施設を視察した。(こども療育センターたんぼぼ園、木の花幼稚園、よしただけ保育園、八日市児童相談センター、教育プラザ富樫、明和養護学校、近隣の児童館等)

たんぼぼ園では、プレイルームが2部屋あり、一部屋は活発に遊ぶ空間として遊具が設置されており、もう一部屋はままごと遊びのようなゆったりと遊べる空間として設定がされていた。また、各教室にはミニアスレチックジムが設置されていたりして、活動的な子どものための配慮がなされていた。近隣の児童館でも、小体育館(活動的な空間)と学習室(おもちゃや本でゆったりと遊んだり学習できる空間)と目的に分けて空間を設置してあることが多かった。教育プラザ富樫でも、乳幼児用のゆったりと過ごせる部屋と3歳児以上の活発な子どもが遊べる部屋と分けた設定がなされていた。木の花幼稚園やよしただけ

保育園では、園児が思いっきり活動できたり、自然と親しみながら遊べたり、目で見ても何をする場所なのかと、わかりやすい環境設定がなされていた。八日市児童相談センターは、こじんまりとした空間ながら玩具の棚にカーテンがつけられ、開け閉めすることで子どもの活動の切り替えがしやすいような設定がなされていた。明和養護学校では、キャスターカーなど手作りの遊具が目をつけた。

これらのことから、児童が室内で遊ぶ空間を充実するために、プレイルームを動的な遊具で活発に遊ぶ空間とし、小ホールを静的な遊具で遊んだり、ゆったりと過ごしたりできる憩いの空間として目的別に活用してはどうかと考えた。そのためにもおもちゃの購入や遊具の製作を行うことにした。おもちゃの購入については、「おもちゃで遊ぼう」（日本グッドトイ委員会）で紹介されたグッドトイ認定おもちゃを参考にし、本校の児童の発達年齢や日頃の様子から、「見る・聞く・動きを楽しむ」おもちゃ10点、「組み立て遊び」おもちゃ3点、「ごっこ遊び」おもちゃ2点を部会の討議を踏まえ選んだ。

購入おもちゃ一覧

- ・「見る・聞く・動きを楽しむ」
 - とんとんボール（ニチガン） わくわくコースター（ニチガン）
 - コミカル自動販売機（TOMY） やりたい放題（People）
 - くるくるミキサーカー（エド・インター） ローラーカップ（ベック社）
 - 大工さん（ジョルダン） 森の遊び箱（エド・インター）
 - だれかなボックス（バンダイ） プラレールの列車（TOMY）
- ・「組み立て遊び」
 - 自分でブロック（People） くみくみスロープ（くもん出版）
 - サボテンバランスゲーム（プラントイ）
- ・「ごっこ遊び」
 - キッチンセンター（Lil Chefs） ピクニックバスケット（エド・インター）

3. 2学期の取り組み

（1）プレイルームの整備

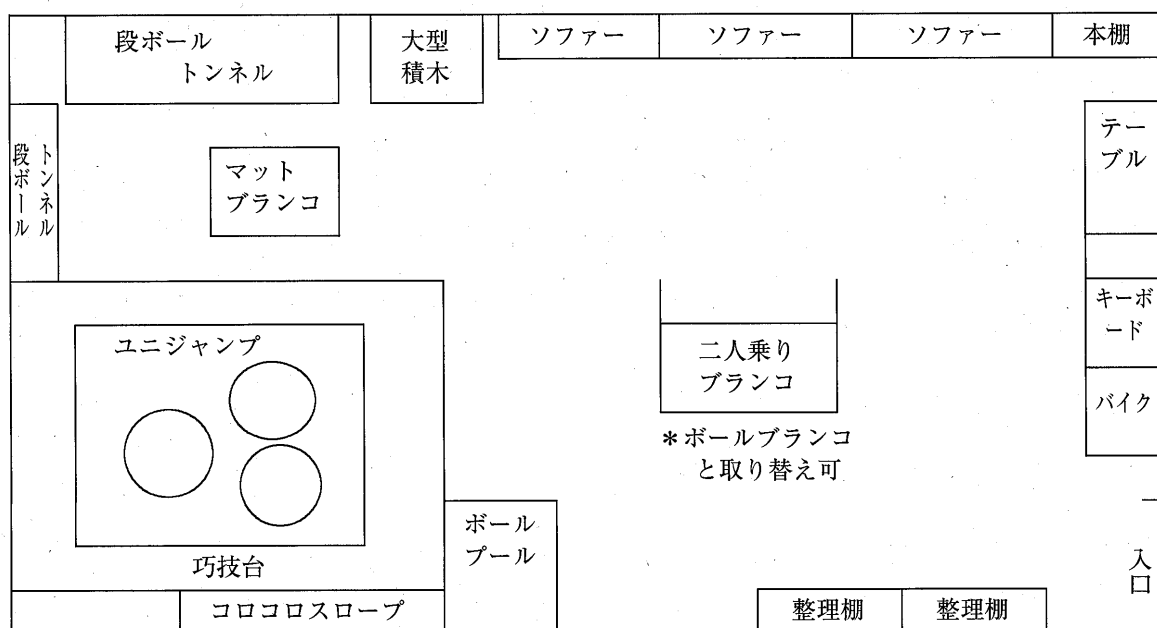
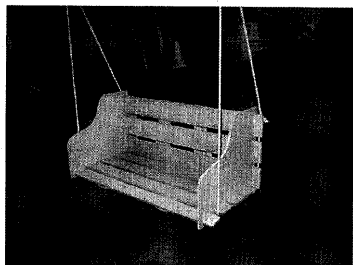


図2 プレイルーム（横12m、縦8m）

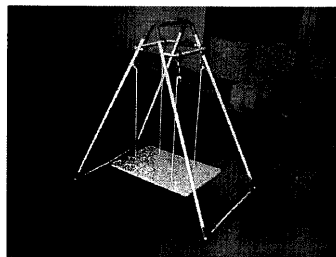
児童が活動的に楽しんで遊べるよう、図2のような配置を考えた。そのためにまずプラレールやミニカー、ままごとセットなどは小ホールへ移動したり、整理棚に入っていた使わないブロックなども撤去したりした。そして以下の3つの遊具を新たに製作した。

①二人乗りブランコ



ボールブランコに一人で乗れない児童用に、乗りやすく友だち同士二人仲良く乗って遊べるブランコにした

②マットブランコ



緩やかな揺れが好きな児童用に箱ブランコの骨組みを利用し、柔らかいお風呂のマットの台に乗れるようにした。

*①と②の遊具は安全性の考慮のため、使用時のみ設置し使用しない時ははずしている



③コロコロスロープ&ボールプール

カラーボールがコロコロスロープから転がってボールプールの中に落ちるよう設定した。ボールプールの感触遊びが好きな児童から転がるボールの動きに関心のある児童まで幅広く遊べる遊具となった。

(2) 小ホールの整備

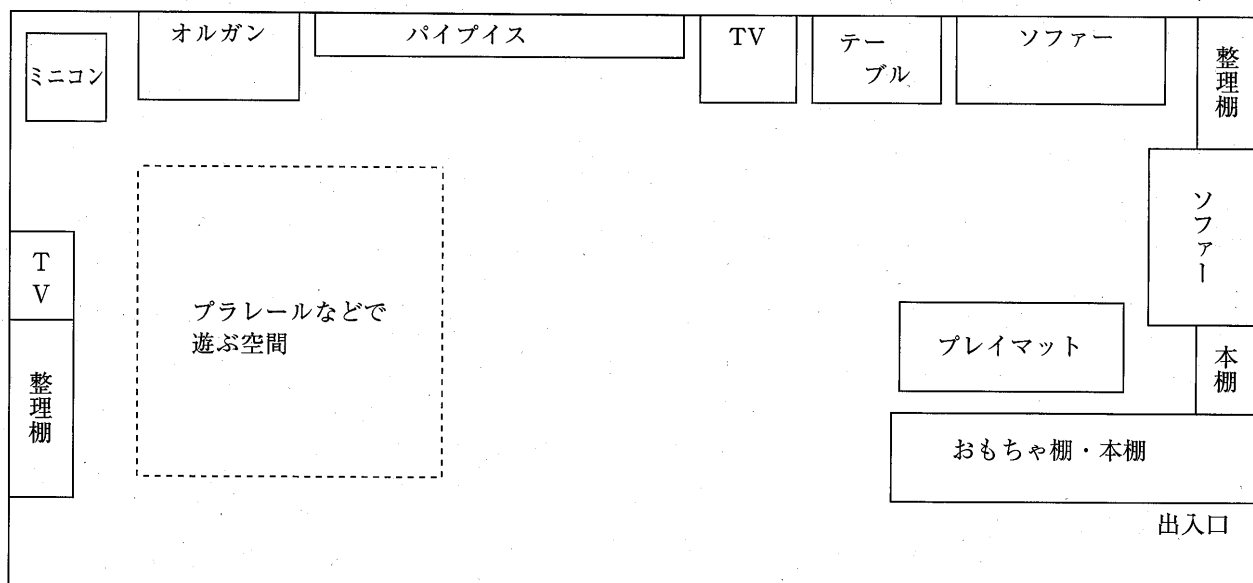


図3 小ホール (横12m、縦6.2m)

小ホールの右側は、ゆったり過ごせるよう上図のようにソファを増やしたり、本棚を設置したり、おもちゃを収納する棚を設置した。また、床に座り込んでも遊べるようプレイマットも準備した。おもちゃ棚には、出したり片づけたりしやすいよう、浅めの箱にお

もちゃを入れ、各おもちゃにおもちゃ名、箱にはおもちゃの写真とおもちゃ名を貼った。またおもちゃの小さな備品（ビー玉など）は児童が口に入れたりすることがあるため、備品箱に入れて整理棚の上に置いて管理することにし、児童が遊ぶ時は教師が取り出し、遊び終えたら備品箱に戻すようにした。



小ホールは、週1回の小学部集会「ランランタイム」で使う以外は時間割上空いている特別教室となっている。そこで小ホールの左側は、プラレールなどのおもちゃで遊んでも明日続けて遊べるよう置きっぱなしでもよいスペースにした。

4. 児童の遊びの変容

2学期末にも1学期同様に室内遊びについてアンケートを行った。その結果を1学期と比較するために以下のような表にまとめてみた。

表2 プレイルームの利用

< 1 学期 >					< 2 学期 >				
	◎	○	△	無		◎	○	△	無
1 組	0 名	0 名	2 名	2 名	→	1 組	3 名	1 名	0 名
2 組	2 名	1 名	0 名	1 名		2 組	0 名	0 名	3 名
3 組	1 名	2 名	2 名	0 名		3 組	3 名	1 名	1 名
全体	3 名	3 名	4 名	3 名		全体	6 名	2 名	4 名

全体的に利用者は少し増えていたが、特に1組の児童の利用の増加が著しかった。3組の児童も増加していた。逆に2組の児童の利用が減っていた。

表3 小ホールの利用

< 1 学期 >					< 2 学期 >				
	◎	○	△	無		◎	○	△	無
1 組	0 名	1 名	1 名	2 名	→	1 組	0 名	2 名	1 名
2 組	0 名	0 名	2 名	2 名		2 組	3 名	0 名	1 名
3 組	2 名	1 名	0 名	2 名		3 組	3 名	0 名	0 名
全体	2 名	2 名	3 名	6 名		全体	6 名	2 名	2 名

全体的に利用者は増えていた。特に2組の児童の利用の増加が著しかった。

表4 その他の場所の利用

<1学期>					<2学期>				
	◎	○	△	無		◎	○	△	無
1組	2名	0名	0名	2名	→	1組	2名	0名	2名
2組	2名	2名	0名	0名		2組	1名	2名	1名
3組	1名	1名	0名	3名		3組	0名	2名	3名
全体	5名	3名	0名	5名		全体	3名	4名	6名

全体的には変化は少ないが、1組の児童の様子を見るとその他の場所に入り浸りでなく、プレイルームへも出かけたりすることが増えていた。

結果をみると、プレイルームは1・3組の児童が多く利用し、小ホールは2・3組の児童が多く利用している。小ホールは2組に近くプレイルームは1組に近い、といった場所的な要因、1組と2組の児童の関心のある遊具やおもちゃの違いが結果として表れているようだが、1組の児童と2組の児童との人間関係もあるようである。

遊びの内容についても、アンケートの中ではプレイルームに設置した3つの遊具はよく利用されており、小ホールの新しいおもちゃやプラレールもよく使用されている。それぞれの空間で、目的にあった遊びが展開されているようである。遊ぶ環境の整備により、3組のA男は以前は遊ぶ物を探しに2階の教室等へ走って行ってしまい行方を捜すことがあったが、今は小ホールかプレイルームで目的別に遊ぶ場所を選んで落ち着いて遊んでいる。また、小ホールのおもちゃの中にはグループ学習で教材として利用されていることもある。

6. まとめと今後の課題

プレイルームと小ホールそれぞれに特色ある遊びができるよう遊具やおもちゃ、室内の配置など環境を整えたことにより、児童の利用が増え、遊びも広がってきた。児童の成長に遊びは欠かせないものであり、和久洋三氏は「全然関係ないものを所狭しと置いておいたのでは、物事が関係づけられるのだという意識が育ちません」と述べていることから遊びの環境設定の大切さをこの研究を進めていく中で改めて感じた。

児童が喜んで生き活きと遊ぶ姿を思いながら実践を進めてきたが、今後は児童一人一人に焦点をあてて、児童の発達を促す遊びについて、おもちゃ・遊具を含めた環境設定をさらに検討していきたい。

<参考文献>

日本グッドトイ委員会(1999):「おもちゃで遊ぼう」千早書房

石川県立小松養護学校(1997):研究紀要、小学部「物や人へのかかわりを広げる遊び」

和久洋三(1999):おもちゃ講演会記録 わらべ館イベントホールにて

http://www.warabe.or.jp/library/waku/waku_12.htm